

## 林住期とティクオフ

久しぶりにテレビを見ながらの日曜日の朝、TOYOTAの収益がGMを抜いて世界一になったことが話題になっていた。しかし多くの企業は世界の中で競争力を失い、日本企業の国際競争力評価は世界第24位に転落しているそうだ。1980年代からバブル崩壊までの10年間、世界第1位の座を守ってきた日本はバブル崩壊後の今、中国、韓国、マレーシアに抜かれているという。番組ではこの順位を復活させるための方策が議論されていた。しかしながら、この順位下降は国の成熟に伴い変わる必然的な結果であり、競争に勝つことだけを追い求める姿勢は変えるべきと感じた。

別のNHK特集番組では中国の高齢者達の、都会から離れた土地に建てられた高齢者施設に集団で入居せざるを得ない社会事情を黙って受け入れる者と納得しがたい者の憤りが画面を通して伝わってきた。子供と同居して生活するという伝統が崩れ、高齢化率世界第一位となってしまったこの国では一人っ子政策が今後さらに拍車をかけ、高齢者問題が大きな社会問題となることだろう。また、わが国では忘れていた30年ぶりの光化学スモッグ情報がニュースになっているが、中国大陸からおし寄せる大気汚染、環境問題も同様である。30年後にはわが国と同じ状況に直面するだろうと予測される。

五木寛之の「林住期」を読んだ。古代インドの考え方従い人生を学生期、家住期、林住期、遊行期の4期に分けて考えると、第3ステージの林住期は青・壮年期のあとにくる4半世紀である。親や社会から教えてもらう25歳までの学生期、次の25年は家族をつくり次世代を育てる家住期、50歳から75歳までの25年を林住期と呼び、学び、家族を育てあげた後、人間として成熟していく期と定義している。五木寛之はジャンボジェットのすさまじい轟音とスピードをあげながらの助走を学生期と家住期に、林住期をリセットではなく充分な助走の後、引き続き迎える離陸に対比される飛躍としてとらえる。社会の成熟も同様に考えれば、失敗しながら走り抜ける助走の後、やっと手に入るものかもしれない。いくら他の国が経験した教科書があっても、自国が直面すれば同じ道をたどるものなのだろうか。文頭の番組でコメンテーターが言う。日本社会は差がなく、同じ枠にきっちりと収まるように教育してきたが、競争に勝つためには違った発想、アイディアが必要である。そのためには多様性が産まれるような教育にしていかなくてはならない、と。

UCLAに短期留学していた時期、病院のエレベーターの昇降スイッチのある壁にすばらしい標語があったのを思い出した。英語、スペイン語、中国語、そして日本語の4カ国語で次のように書かれているものである。

『UCLAヘルスケアコミュニティは、文化的にも、人種的にも世界で最も多様性に富んだ都市の一つに位置しています。この多様性はスタッフ、患者の構成にも反映されており、当病院の貴重な資産となっています。UCLAヘルスケアセンターはこれらの多様性、つまり、民族、国籍、人種、性別、性的志向、経済レベル、年齢、ハンディキャップの有無、といった違いを高く評価し、また尊重します。私たちはこれら人間の多様性についてさらに理解と認識を深め、また人間の尊厳を保持することに献身します。この献身は唯一、私たちコミュニティーの実践的な努力によってのみ実現が可能です』。

差を埋めるための小手先の教育・施策ではなく、多様性を認める土壤を作り上げることが、社会の成熟プロセスを正しい方向に導くものではないだろうか。今がまさに、日本社会が五木寛之のいう助走のとの質の高いティクオフができるかどうかの分かれ道である。